

藝大の在校生・卒業生は、  
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、  
また各分野の最前線で活躍している。  
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

東京都美術館「Arts&Life：生きるための家」最優秀賞受賞

## 山田 紗子

◆大学院美術研究科建築専攻 修士課程2年

藝大のすぐ近くにあり、長らく改修工事  
をしていた東京都美術館のリニューアル後  
の最初の企画展「Arts&Life：生きるための  
家」は、これからの住宅について提案を  
公募するもので、表彰作品を模型で展示し、  
最優秀賞を受賞した提案は原寸大で展示  
するというものでした。

企画自体は東日本大震災の前から立案  
されていたのですが、震災を踏まえて、  
コミュニティの重要性や、避難所における  
プライバシーといった課題も重要なテー  
マになったようです。私は、実質的な耐震  
技術や高台移転の問題なども大事ではあ  
るけれど、自然の恩恵とともにリスクがあ  
る日本の土地の上で、大地に根づく建築、  
人間が力強く生きていくための建築をつ  
くりたいと思っていました。

もともと自然が好きで、大学時代（慶應  
大学環境情報学部）は、街のなかに水や  
緑をデザインできると思い、ランドスケ  
ープデザインの研究室に所属しました。ただ

しそこでの研究は、河川の水質調査や生  
態系のフィールドワークが中心で、意匠的  
なものよりも計画学の色が強いものでし  
た。もう少しデザインを深く学びたいと思  
っていたところ、在学中に留学したUCバ  
ークレーで建築設計スタジオを受講し、本  
格的に建築を志すきっかけになりました。

大学卒業後は、建築家の事務所をみて  
みたいと思って連絡をとった、藤本壮介建  
築設計事務所に就職して4年間働きました。  
大学の卒業設計で建築に取り組んだ  
ものの、建築の基礎を知らないまま入所し、  
図面の書き方からコンセプトの作り方まで  
手取り足取り教えてもらいました。

藝大大学院では北川原温研究室で自由  
な研究と活動をさせていただいています。北  
川原先生は、藤本さんと志向は違うけれど、  
おもしろいものをつくりたいという価値観、  
新鮮なものを提案していく意気込みで共通し  
ているように思います。

「生きるための家」展で最優秀賞をいた

だいた私の提案（「柱の家」）は、家を支え  
る十数本の大黒柱が林立するように敷地  
に立ち、傾斜した床や屋根を貫通させた  
ものです。近年の建築のトレンドとしては、  
すっきりとシンプルで白を基調としたもの  
が多いのですが、日本の風土とは切り離  
されているような、抽象的表現が強すぎ  
るような感じがしていました。

震災後3ヶ月を経過して、街づくりや  
集会所の設計のお手伝いで岩手県の釜石  
に1年間通いました。岩手の遠野地方には  
「曲り家」という古い民家があり、そこ  
には東北の太い柱の持つ安心感があり、柱  
に寄りかかることで自分ひとりの空間をつ  
くることができる。こういった伝統的な木  
造家屋の空間を感じたこともあり、重さや  
ヴォリューム感に対する欲求とともに、フ  
レキシブルに伸び伸びしながら支え合っ  
て、柔らかくかつしっかり建っているという  
のが私にとって、震災後の「家」のイメージだ  
ったのです。



「Arts&Life：生きるための家」展コンペティション最優秀賞受賞作品  
の東京都美術館における展示風景。photo: Masataka Nakano

やまだ・すずこ

1984年東京都生まれ。2007年慶應義塾大学環境情報学部卒業後、藤本壮介建築設計事務所勤務を経て、個人の設計活動を開始。現在、東京藝術大学大学院美術研究科北川原研究室在籍（2013年3月まで）。『SDレビュー2011』奨励賞受賞、2012年に東京美術館「Arts&Life：生きるための家」展コンペティション最優秀賞受賞。

第81回日本音楽コンクール本選会・作曲部門第1位・同岩谷賞(聴衆賞)受賞

# 平川加恵

◆大学院音楽研究科作曲専攻 修士課程3年

1、2歳のころから、両親が買ってくれたおもちゃの卓上ピアノで遊ぶのが大好きで、2台くらい弾き潰してしまったそうです。何かの曲を弾くというのではなく、ただ流れてくる音を真似して弾いていただけみたいなのですが。やがてピアノを習うようになり、4歳くらいのとき、即興で弾いたものを先生が楽譜に起こしてくださったのが、今となっては作曲の始まりでした。いたってシンプルなメロディの短いピアノ曲ですが、自分のひきだしとして今でも弾くことがあります。

小学生になると、通っていたピアノ教室に作曲コースが開設されていたので、作曲の手ほどきを受けるようになり、藝高(東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校)をめざしました。

藝高のとき、作曲は学年で一人だけだったのですが、でもそれが何よりだった

のです。自分がつくった作品を、器楽を学ぶ友人がすぐ音にしてくれるし、楽器についてわからないことも教えてもらえる。ほんとうに贅沢な環境でした。高校時代はピアノ・ソナタから始め、そこに弦楽器を交え、ピアノ協奏曲を書いたりしていました。旧奏楽堂で、自作のピアノ協奏曲を、自分がピアノを弾き、友達がオーケストラを弾いてくれたという楽しい経験もありました。

大学院に進んでからは野平一郎先生にご指導いただいています。教えていただくことが目から鱗というか、耳から鱗で、先生ご自身もピアニストでもあるのでアドヴァイスはとても参考になります。

今回、日本音楽コンクールで第1位をいただいた「降る、降る、降る」は、三管編成のオーケストラで、ピアノが中心的な役割を果たして、その音が終始聴こ

えてくるような曲になっています。最近、曲づくりで目標にしていることが、音楽が視覚的なイメージを与え、立体的なものが生まれてくることなのです。この曲でも、空中から音が降り注いでくるイメージを、聴く人に感じてもらいたかったのです。美術と音楽は、空間につくるか時間につくるかの違いはありますが、共通する部分も大きいと思うのです。

じつは日本音楽コンクールは3度目の挑戦で、これまでは第1予選も通らなかったのです。でも今回、第1位の受賞はもちろんのこと、聴衆賞をいただいたのがほんとうにうれしいことでした。コンクールを聴きにきてくださったみなさんに、私の意図が伝わったことを確認できたからです。今回の受賞を励みに、これからはジャンルをかぎらずさまざまな曲を作っていきたいと思っています。



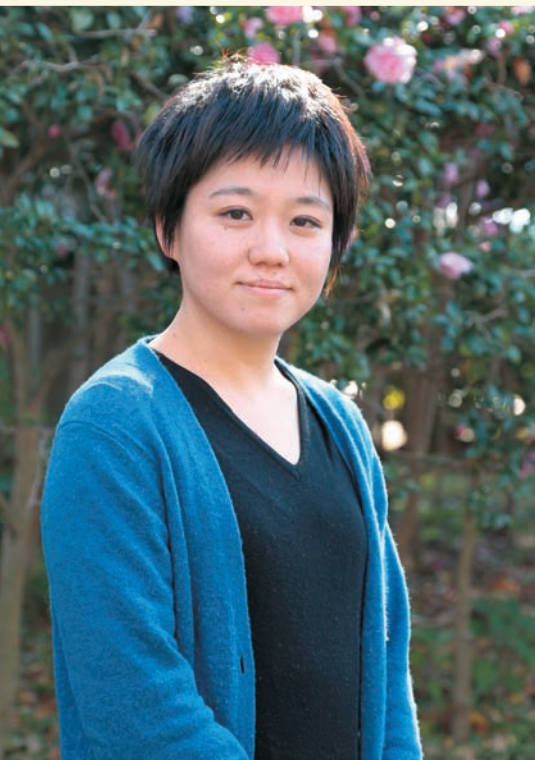
第81回日本音楽コンクール  
(2012年10月)本選での演奏  
©毎日新聞社提供

ひらかわ・かえ

1986年千葉県生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校作曲専攻、同大学作曲科を経て、現在同大学院音楽研究科作曲専攻修士課程在学中。大学在学中に安宅賞受賞。卒業時にアカンサス音楽賞受賞。2008年、武生作曲賞入選。2009年、藝大モーニングコンサートにて作品が演奏される。2010年、第20回芥川作曲賞ファイナリスト。2012年第81回日本音楽コンクール作曲部門第1位・岩谷賞(聴衆賞)、明治安田賞受賞。第29回現音作曲新人賞において富樫賞、聴衆賞受賞。これまでに作曲を、佐藤眞、中田直宏、夏田昌和、野平一郎の各氏に師事。







「くじらのまち」2012年

つるおか・けいこ

長野県生まれ。立教大学現代心理学部映像身体学科卒業。現在、東京藝術大学大学院映像研究科映画専攻監督領域在学中。2012年に「くじらのまち」で「ぴあフィルムフェスティバルアワード2012」のグランプリとジェムストーン賞(日活賞)を受賞。

ぴあフィルムフェスティバルアワード2012グランプリ受賞・同ジェムストーン賞(日活賞)受賞

## 鶴岡 慧子

◆大学院映像研究科映画専攻監督領域 修士課程1年

長野県菅平高原の出身で、映画好きの父に上田の街にある映画館に連れて行ってもらえるのが楽しみでした。ロードショーで公開されるアメリカ映画の大作がふつうに大好きで、スティーヴン・スピルバーグ監督の「ジュラシック・パーク」を観て、映画ってなんでもできるんだな、と将来自分で撮ることを夢見たのです。

大学は創設されたばかりの立教大学現代心理学部映像身体学科に進学。カリキュラムは美術寄り、作品寄りではなく商業的なもの、劇映画の手法やあり方を学ぶことができました。卒業制作は論文か作品か選べるので、映画サークルの仲間と作品をつくって提出することにしたのです。もちろん自主制作で脚本も自分、出演者も同じサークルの友人たち。埼玉の新座にある立教高校も舞台にしました。

習作のような短編は監督していたものの初めての長編映画になった「くじらのま

ち」は、長野に住んでいる主人公の女子高生“まち”が、二人の同級生とともに、6年前に失踪したお兄さんを捜しにいくという話です。

この映画は「ぴあフィルムフェスティバル」に応募するとともに、大学卒業後の進路として志望していた、藝大大学院映像研究科の入試課題でも提出しました。

映画サークルの学生にとっては、映画が形になったら「ぴあ」へというパターンがあったので応募しました。1次審査、2次審査を経て、16本の入選作品(応募総数522本)に入ってほんとうに驚きました。しかも入選作のなかに別の学生映画祭でグランプリを取った作品があり、「くじらのまち」がグランプリを受賞するとは予想もしていませんでした。さらに日活さんから、「ジェムストーン賞」をいただいたのは、商業映画の感覚を学んだ大学4年間の成果だったかもしれません。いろいろな感

想をいただいたなかで、「演出がよかった」と褒められるより、「役者の演技がよかった」「カメラワークがよかった」と言われるほうがうれしいですね。そういう仲間と一緒に作品をつくれたことが、大きな収穫だと思うので。

藝大大学院への進学は、創設されたときにも話題になっていたし、高校のころから望んでいました。実際に入学してみると、監督・撮影・脚本・編集といったように領域が分かれ、役割分担が明確なところが新鮮です。監督領域の黒沢清先生は、映画はこういうものだ、と押しつけるところがなく、先生の作品のディテールを尋ねると、親切に教えてくれるところがうれしいです。

今後の映画作りにあたっては、商業寄りか作品寄りかと固めず、フラットな状態でいたいと思っています。